

生徒指導の「いま」がわかる

月刊

生徒指導

特集

教師の誤解と 保護者の言い分

特集 LINE UP

- 保護者の日常を知る～“教師は世間知らず”と言われなかったために
- なぜ保護者は教師を批判するのか～中間層の保護者に支持されるには～
- 教師に誤解されやすい保護者の理解～インテリな親を例に～
- 「勉強なんてやったって無駄」の背景にあるもの
- 和田中の実態～学力と生徒指導のかかわり～

2017

10

「勉強なんてやっただって無駄」の背景にあるもの

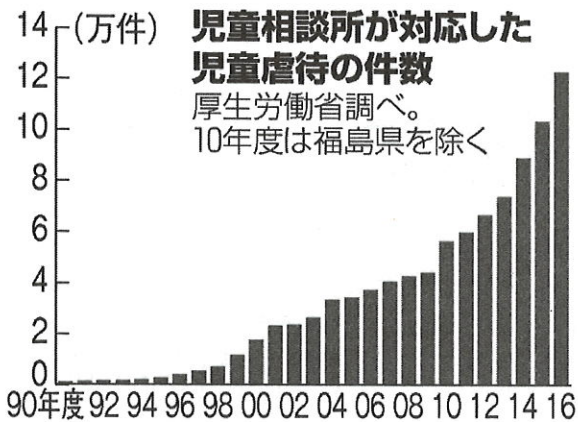
「勉強なんてやっただって無駄」。これは、私が日ごろ虐待や貧困などの環境で育ってきた子どもたちからよく聞く言葉です。支援の中で、子どもの意思や能力のせいにはできない、貧困や虐待の現状が見えてきます。

※本記事は、個人が特定できないよう意味が変わらない範囲で内容を編集しています。

学校が嫌いなのは、ただ単に悲観的だからではなかった

私をはじめ彼に会ったとき、彼は既に学校や勉強への意欲はほとんど残っていない状況でした。その学力は小学校1、2年生レベルですら抜け漏れが多い状況でした。中学校の数学をやるうにも、教科書で公式を見て小学生のころの四則演算がうまくとけないので人の何倍もかかってしまう。

そもそも勉強の習慣がないので、長時間、机に座っていることに慣れない。誰かに勉強を教わる習慣もないので、勉強を教えてもらうということ自体がなんだか気持ちが悪いです。そんな状況でした。5分ほどしたら、顔を伏せて寝てしまいました。おそらく学校でも同じような感じだったのかもしれませんが。中学生のときに育児放棄で保護され、施設に入所した彼はひとり親家庭で育ちました。母親は彼を含めた3人の子どもを育てるために朝から晩まで働いていました。父親のことはよくわからず、まだ家庭にいたときも連絡すら取れない様子だったので、おそらく養育



※2000年から比較すると10万件ほど増加している。

認定NPO法人 スリーキーズ 3keys
代表理事

森山 誉恵

もりやま、たかえ
大学時代、児童養護施設でのボランティアをきっかけに3keysを設立。学習支援や悩み相談・対応、支援機関への橋渡しを行っている。全国子どもの貧困・教育支援団体協議会幹事。

費をもらえなかったのだと思います。子育てと長時間労働を両立させるのは困難なため、母親はパートや夜の仕事をかけもちしながらなんとか生活している状況だったそうです。

幼いころから保育園や小学校と学童保育等、集団の中の一人として育ち、彼の小さな成長や、小さなつまずきに気づいてくれたり、常に気にかけてくれたりする人はいませんでした。

絵本を読んでもらったり、スーパーに買い物に行つて野菜や果物などの食べ物のルーツについて親から教えてもらったり、小さな成長をほめてもらったり、学校での悩みに寄り添ってもらったり——彼にそんな経験はなく、自分の未熟な力で見えない壁を乗り越えていくほかありませんでした。

私が会ったとき、彼は中学生で思春期ということもありましたが、子どもらしく大人に甘えたり、頼ったりする姿勢は同世代の子どもたちに比べても全くなく、とても達観していて、小さな大人のようにも見えました。

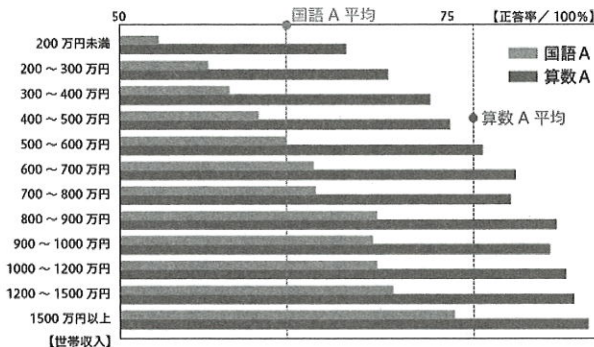
それでも、周りの友達と同じ授業を受けているのに「何で自分は解けないんだろう」という疑問が常にあったようです。小学生のこ

ろから、自分は周りよりも長い文章が読めなかったり、ひらがなやカタカナを覚えるのが遅かったりしているのを感じていました。

ほかの友達は塾や習い事、幼児のころから家での教育などがあつてのいまの学力ですが、それを知らない彼にとって「自分は馬鹿だ」と結論づけるまでには時間がかかりませんでした。その結果、小学校3年生のとき、学校にいるのが苦痛で仕方なくなりました。毎日そんな状況が3年間も続けば、不思議で

世帯収入と子どもの学力（対象／小学6年生）

出典：国立大学法人お茶の水女子大学「平成25年度全国学力・学習状況調査（きめ細かい調査）の結果を活用した学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」



はありません。

私に向かつて彼はいつも「俺はサッカーをして食っていくから勉強はいらぬ」と言っていました。小さいころから親が出かけるときは父が好きだったというサッカー番組を録画したビデオを母親が見せてくれていたせいもあつて、サッカーが好きだったようです。一人でよくサッカーボールで遊んでいたし、クラスでも得意なほうでした。

しかし、サッカーでも、放課後にサッカー教室に通っている部活の友達と少しずつ差が開いてきている状況も感じていました。交通費がなくて練習試合等に行けないことも続き、部活でも孤立しつつありました。口ではサッカーで食っていくと言っていた一方で、その表情からは既に厳しい現実を悟っていることが伝わってきました。

自分なりの生きる術によってさらに孤立する

中学生になった彼は、夜遅くまで公園やコンビニなどで遊ぶ習慣がありました。

学校へは行くけれど、授業についていけない

いので寝ているか友達と話して終わる。部活動のサッカーをして帰るけれど、それでも授業で寝ていたことや、年齢的にエネルギーがあり余っているせいもあって、放課後は夜まで遊んで過ごしていました。

家庭にいたころは、誰もいない家には帰りたくないし、塾や習い事に行くお金もない家庭なので、自然と夜まで友達と遊ぶけれど、楽しいのは最初だけでだんだんやるのがなくなってくるので、たばこや飲酒、夜の時間にいる年上の人たちとつるむようになっていました。

先生や友達は、夜の公園などにいる年上の人たちのことは危ないし、つるまないほうが良いと言います。しかし、彼にとつては年上の人たちは自分よりも社会を知っていて、学校の先生のようにきれいなことだけでなく、自分の感じている現実と近い現実を語ってくれるからリアリティがあつて勉強になる。だんだん、社会も知らずに勉強だけをしているクラスの友達とも話が合わなくなって、学校でもいわゆる「不良」と呼ばれる部類になっていきました。友達や先生に怖がられ、ますます学校に居場所をなくし、勉強がわからなく

ても、「怖がられている自分に教えてくれる人がいるはずもない」と思う中で勉強もあきらめていました。

これは私の想像ですが、「怖がられていること」で注目を浴びるといふのは複雑な気分だったのではと思うことがありました。自分のもとから人が離れていく寂しさを抱えながらも、やつと何かで一番になれたといううれしさや、それ以外の自分らしさが見つからず、「怖がられていること」に自分らしさを見出すようになっていくようにも見えました。それが思春期の彼にとつて自分を保つことでもあつたのだと思います。

学校の中で似た境遇にいる他クラスの友達と仲良くなり、放課後に一緒に公園でつるみ、恵まれたクラスの友達の守られた状況を鼻で笑いながらも、うらやましそうに話すときもありました。

高校進学と自立

彼の学力で高校進学するのはかなり厳しいものでした。みんなが塾などで受けるV模試なんかも受けるお金がないので、過去の問題

などで判定をしてみると、中学3年生の学力で、週1、2回の私との勉強だけでは一般人試で受かるような状況ではありませんでした。

仕方なく、彼の大人びた話し方を武器にと考え、推薦入試に切り替え、なんとか定時制の高校に合格することができました。彼は高校選びのときに「基礎からやり直せるところがいい」なんてことをほろつとっていて、そのとき「彼も本当はなんとかしたいと思っ

ているんだな」という本音を垣間見たように思いました。

高校に進学した後は中学とは違って境遇が似た友達も多く、中学での「怖がられる人」というレッテルもなくなり、どこか肩の力が抜け楽しんでいくようにも見えました。しかし、学力面では人一倍遅れており、やはり苦労を重ねていたように思えます。2年生にもなれば友達との付き合いは長くなり、学校に行かなくても好きな友達と遊べるようになるので、とうとう学校に行く意味も見出せなくなりました。親に頼れない分、アルバイトもたくさんするようになり、3年生のとき、ついに中退となりました。

18歳になり施設を出た後は、さらに深刻な状況に置かれました。高校まではアルバイトで稼いだお金は、自分のお小遣いと貯蓄に当たっていました。周りの友達に比べて常にお金に余裕があり、それが頑張つて生きている自分の誇りでもありました。

しかし、施設を出て一人暮らしをするとなると、家賃と食費等で稼いだお金はほとんどなくなりました。アルバイトのかけもちをするようになり、なんとか手取りで15万円から20万円ほど稼げるようになりましたが、休みなく働くようになって、体調を崩すことが頻繁に起きるようになったのです。そうするとアルバイト先からの信用も失うようになり、やめざるをえないときが何度かありました。次のアルバイトを探し、給料が入るまで家賃の支払いが厳しくなり、彼女の家に居候することも増えました。しかし、別れると敷金礼金などの初期費用を払うことは難しいため、次の居候先を見つけて……ということを繰り返して、住所不定の状況が続くようになりました。

実家がないこと、大変なときに助けってもらったり、休ませてもらったりする場所がない

ことがいかに厳しいことか、日々痛感しながら生きています。これまで週に1回は自分がかかわっていながらも、まだ苦勞を重ねている彼を見て、いかに貧困や家庭環境の格差の根が深いかを実感しました。一人のボランティアにできることには限りがあると感じ、本業としてこういった子どもたちを支援するNPOを立ち上げるきっかけとなりました。

「子どもの貧困」とは何か

「子どもの貧困」とは、各国における貧困線以下の所得で暮らす17歳以下の子どもの存在・生活状況を指します。「貧困」というと途上国で起きている問題と思われがちですが、その国の物価・生活・教育レベルによって、最低限必要な生活ラインは異なりますので、いくら先進国であつても貧困はあります。

前述した彼のように、学校には行っていないけれど貧困状態である子どもたちは実はたくさんいます。さらに深刻なのは、貧困状態が育児放棄を含む虐待につながることで、貧困から抜け出そうと親が働き詰めになって、子どもにも愛情や教育を注ぐ余裕すらなくなる

ケースも少なくありません。

日本では現在、7人に1人ほどの割合で「子どもの貧困」が存在しており、30〜40人学級でいえば5〜6人はいてもおかしくない計算になります。しかし、いまは、経済的に豊かな人は住まい（地域）や学校までも選択できる時代です。同じ東京都でも住む地域によつて所得水準は大きく異なりますし、家庭によつては幼稚園や小学校から教育水準も費用も高い学校に通わせることがあります。地域や学校に「貧困」の子どもがいないエリアと、7人に1人よりも高い割合で「貧困」の子どもが存在し、むしろ貧困が珍しくない（＝当たり前な）人たちがいる、という二極化が進んでいます。どちらにとつても「貧困」は実感しづらく、だからこそ知らぬ間に大きな隔たりが生まれ続けているのが現状だと感じています。

学校の先生ができること

こういう環境で育ってきた子どもたちは、大人に助けを求めても助けってもらった経験がなかったり、心配をかけたくない気持ち

などがあつたりします。そのため、困ったことを聞いても「大丈夫」と言う子どもがたくさんいます。まず第一歩は、子どもの「大丈夫」で安心して解決したつもりにならないことだと思えます。

また、実は先生方も、困っている子どもが発している SOS にはなんとなく気づいているのではないかと思います。問題は先生が気づいていないことではなくて、気づいた後にどうしたらよいかわからず、目をつぶるしかないと感じていることではないでしょうか。

先生は子どもたちの異変を感じやすい立場にいますが、その解決までも先生が担うのは、いまの先生の業務負担や、教員養成課程の現状から考えると現実的ではないでしょう。

心配なときは、スクールソーシャルワーカーなどと相談しながら、もう一歩踏み込むことで見えてくることも多いように思えます。また、子どもの支援を担う NPO などに相談・連携するのも良いかと思えます。

3 keys では、虐待や貧困などの元で育った子どもたちの学習支援をしていたり、子どもたちの相談窓口を運営しています。また 10代が利用できる支援サービスを検索し、そ

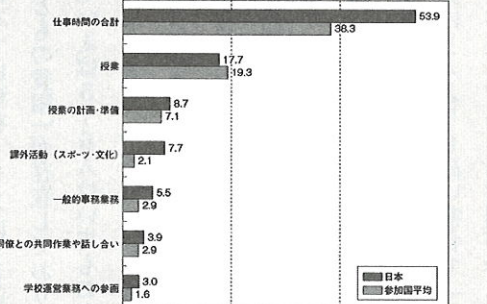
の場で相談できるサイト「Mex（ミークス）」というものも運営しています。3 keys のような民間団体は各地域にもあるので、ぜひそういった NPO などに相談をするのも良いかもしれません。また、もしスクールソーシャルワーカーや地域の NPO などとつながりにくいときには、「Mex（ミークス）」を使うと子どもたちの支援を行っている支援機関を見つけることもできます。こちらは主に 10代向けに作ったサイトですが、大人が見ても参考になるサイトだと思えます。

ただ、子どもたちの困難に向き合い、学校内外で相談・連携するためには、何より先生の余裕をつくるのが大事だと思います。子どもの SOS を発見しても、それに向き合う余裕や、連携する余裕がないと、結局解決しません。ス



※10代向け支援サービス検索・相談サイト「Mex（ミークス）」全国版スマートフォンからでもパソコンからでも利用できます。https://mex.jp

図表 2-1-4 教員の1週間当たりの仕事時間（TALIS 2013調査結果）



※前期中等教育段階の教員が、最近の「通常の一週間」において、各自の仕事に就事した仕事の平均、「通常の一週間」とは、休暇や休日、病気休暇などによって勤務時間が短くならなかった一週間とする。

※教員の1週間当たりの仕事時間。合計時間はOECD平均より15時間も長いものに対して、授業以外の業務が多いことが特徴として見られます。出典：OECD国際教員指導環境調査（TALIS）2013年

クールソーシャルワーカーの配置数の増加や、先生一人当たりの担当数や業務負担を減らすことも必要です。いまは子どもに向き合いきれていないことを自責するよりも、ぜひ一人で抱えず、先生自身が SOS を発信できるようになってほしいと感じています。それが仕組みの改善にもつながりうると考えています。私たちが運営する 3 keys もまだ小さい団体ですが、何かできることがあればぜひご連絡をいただけたらうれしいです。